朝鮮古蹟圖譜解說 二

朝鮮古蹟圖譜解說 二

目次

二 高勾麗時代

乙 平壤長安城地方（平安南道平壤附近）

六一 土城洞發見瓦（三四三―三八三）……一
六二 傳安鶴宮址（三八四―四〇二）……二
六三 大城山城（四〇三）……二
六四 平壤城（四〇四―四三〇）……三
六五 漢王墓（四三一―四四九）……四
六六 漢王墓附近古墳露出石槨（四五〇）……六
六七 寺洞古墳群（四五一）……六
六八 寺洞及唐山洞古墳群（四五二）……六
六九 寺洞古墳（四五三―四五八）……六
七〇 梅山里古墳群（四五九・四六〇）……七

七一　梅山里四神塚〔四六一—四七八〕……七
七二　花上里古墳群〔四七九・四八〇〕……八
七三　龕神塚〔四八一—四九八〕……九
七四　星塚〔四九九—五〇九〕……一〇
七五　安城洞大塚〔五一〇—五二六〕……一〇
七六　雙楹塚〔五一〇・五二七—五八一〕……一一
七七　肝城里蓮花塚〔五八二—六〇〇〕……一三
七八　遇賢里三墓〔六〇一・六〇二〕……一四
七九　遇賢里大墓〔六〇三・六〇五—六二九〕……一四
八〇　遇賢里中墓〔六〇四・六三〇—六四五〕……一五
八一　遇賢里小墓〔六四六—六四八〕……一六
八二　黃山南麓古墳〔六四九—六五二〕……一七
八三　黃山西南麓古墳〔六五三・六五四〕……一七
八四　黃山南腹古墳〔六五五〕……一七
八五　靑龍山西南麓古墳〔六五六〕……一七

八六 桂明洞古墳〔六五七—六五八〕……一七
八七 龍岡邑附近古墳〔六五九〕……一八
八八 雲化洞露出石槨〔六六〇—六六二〕……一八
八九 新店洞古墳〔六六三〕……一九

朝鮮古蹟圖譜解說第二册

二　高勾麗時代

乙　平壤長安城地方（平安南道平壤附近）

此地方は長壽王の十五年（允恭一六、耶蘇紀元四二七）都を平壤に遷しゝより、寶藏王の二十七年（天智七、耶蘇紀元六六八）唐に亡ぼされしまで、前後約二百四十一年間、成熟せる高勾麗文化の中心となりし處なり。

六一　土城洞發見瓦（三四三—三八三）

平安南道大同郡大同江面土城洞なる樂浪郡治址（?）及び其東方の畑地より、高勾麗時代に屬する瓦を多く出す。（地圖一參照）其形式文様は支那奉天省輯安縣なる將軍墳、太王陵及び千秋塚より出だすものと同じきもあ

り、又之より年代稍後れて北魏式の影響を認むべきもあり。此等夥しき古瓦片の存在せるより推想すれば、蓋此處は樂浪郡亡びて後、直に高勾麗の重要なる一地點となりしものなるべし。

六二 傳安鶴宮址(三八四―四〇二)

平壤の東北約三里、大同郡林原面、大城山下なる安鶴宮と稱せらるゝ處にあり、(地圖一參照)方約五六町繞らすに土城を以てす。傳へて高勾麗の安鶴宮の遺址と稱し、又長安城の故地とも云ふ。土城内より高勾麗時代の者と認むべき巴瓦及び唐草瓦を多く發見せり。其地形より判ずるに、或は長壽王の遷り都せし平壤城王宮の址跡にはあらざるか。猶後考を俟つ。

六三 大城山城(四〇三)

安鶴宮址の北、大城山上の險要に據りて石築の城壁を繞らせり、其形制

輯安の山城子山城の如し蓋山下なる安鶴宮址と密接なる關係を有するものなるべく、彼は當時の王宮にして、此は萬一の虞に備へんが爲に設けられたる山城なるべし。

六四　平壤城〔四〇四—四三〇〕

平壤には今內城及び外城あり。高勾麗時代には、是等內外城を包括して周圍に土築の城壁を築きし者なるべし。今尙土城の遺址を存す。（地圖一參照）江岸通なる城壁中より發見せられたる石材には二十餘の刻字あり、蓋高勾麗時代のものなるべし。又蒼光山よりは高勾麗末に屬する赤色の瓦片の出づる事多し、滿洲通溝附近より出づる者と同手法なり。蓋當時の重要建築物の立ちし處ならん。

又外城內に箕子井田の址と稱する者あり、縱横の道路井然碁局の如し、道路の交叉せる處の四隅に石を立てゝ標となす。思ふに今の平壤の地は

恐らくは平原王の奠都せし長安城なるべく、此縱横の道路は蓋當時條坊區畫の遺制にして、後世誤つて井田の址と傳へたるものなるべし。外城内平壤驛の東南なる鐵道工場敷地よりは、蒼光山より發見せられたる者と同樣なる高勾麗末期の赤色の瓦を多く出だせり。

六五　漢王墓（四三一―四四九）

平安南道江東郡馬山面漢坪洞、江東を西々北に距る約四里、大同江右岸なる小丘陵地に在り、一に皇帝墓と稱す。方形二層の基壇上に築かれたる大圓墳にして南面せり。徑約三十間、高さ約六間あり、墓の南方には石を列べて前後に長き長方形の前庭を作れり。

墳の表面より深さ一尺許の處には、一面に平瓦丸瓦巴瓦等の破片（四三九―四四二）を並べ葺き、以て雨水の内部に浸透するを防ぎたり。

玄室は方形にして、四壁より持送を出す事二重、更に隅三角平三角の持

迸石を出し、最後に其上を一石を以て覆ひ、巧に天井を構成せり。其形式通溝地方の土塚に見る所の如し。又室の南面には羨道に通ずる口を開きたり。羨道は長くして、内中外の三所に於いて、石扉若くは石を立てゝ閉塞せり。玄室及び羨道の壁天井には厚く漆喰を塗りたり。玄室内には左右に二個の石床を並べ置き、其上東西に當初二個の木棺を置きたりしが、今崩潰せり。木棺の內部には朱漆、外部には黑漆を塗りたる形迹あり。

此墓は早く發掘の厄に逢ひ、爲に副葬品を存せず、僅に封土中より陶製廣口の小坩を發見せしのみ。

江東郡の邑誌なる吳州志には、此墳を以て東川王の墓となせども、當らず。墓上より出土せし瓦の手法は輯安の將軍墳より發見せられし者に近ければ、恐らくは長壽王若くは之を距ること遠からざる時代の陵墓ならん。

六六 漢王墓附近古墳露出石槨(四五〇)

漢王墓附近には今十八基の高勾麗時代の小墳ありて、石槨の頂部露出せるもの多し。皆漢王墓と略年代を同じくするものなり。

六七 寺洞古墳群(四五一)

六八 寺洞及唐山洞古墳群(四五二)

平安南道大同郡林原面なる傳安鶴宮址の西北方、寺洞及び唐山洞に高勾麗時代に屬すべき無數の土塚散在せり。(地圖一參照)其多くは既に發掘の厄に罹れり。又石塚の崩壞したるものと認めらるゝものも存せり。

六九 寺洞古墳(四五三——四五八)

安鶴宮址の西北約十町、大城山下に在り。圓墳にして、玄室の構造は漢王

墓に同じく、其天井は高勾麗特有の構架法を用ひ、壁天井共に塗るに漆喰を以てし、床には竪に長く並びたる二個の棺座を作れり。副葬品は何物をも發見せず。唯木棺に用ひし者と思はるゝ鐵釘を獲しのみ。

此古墳は附近に散在せる無數の古墳と共に高勾麗時代に屬し、安鶴宮址及び大城山城址と最密接なる關係を有する者なるべし。

七〇 梅山里古墳群〔四五九・四六〇〕

平安南道鎭南浦の西々北約二里半、龍岡郡大代面梅山里の丘陵上に二十基許の古墳群あり（地圖三參照）二基三基又は四基東西に並びて配布の狀稍整然たり。何れも高勾麗時代のものにして、平壤遷都後の初期に屬するものなるが如し。

七一 梅山里四神塚〔四六一―四七八〕

丘陵上の圓墳にして、玄室は高句麗時代の墳墓に通有なる天井を有し、前面の左端に羨道を設く。玄室の壁天井には漆喰を塗り、四神圖及び文樣を彩繪せり。即後壁には主人公及び妻妾と思はるゝ者並に牽馬の人物、玄武を寫し、東壁には蒼龍及び騎馬人物を、西壁には白虎及び狩獵の圖を描き、南面入口の右には朱雀即雙鳳をあらはせり。更に東西の壁上には日月の象を相對せしめ、北壁上には北斗圖を作れり。又持送には一種の雲文及び唐草文を繞らしたり。是等の繪畫文樣の手法は甚古拙にして、多少稚氣を帶ぶ。而も能く六朝時代藝術の特色を具へ、未だ佛敎藝術の影響を認むること能はず。恐らくは約千五百年前頃の者にして、今日までに知られたる日本朝鮮支那を通じて遺存せる最古の繪畫なるべし。

七二　花上里古墳群〔四七九・四八〇〕

梅山里古墳群の西北約十町、一丘陵上に十數基の古墳あり。（地圖三參照）

何れも高勾麗平壤遷都後初期のものなるが如し

七三　龕神塚〔四八一―四九八〕

平安南道龍岡郡新寧面花上里なる丘陵上に在り、花上里古墳群中最重要なるものなり。圓墳にして、內部は玄室及び前室の二より成り、天井は高勾麗に特有なる構造の稍簡なる者なり。此等の壁天井には漆喰を塗り、其上に繪畫文樣を施せり。玄室の者は剝落甚しきも、前室の者は比較的完全にして、當時の建築服飾思想等の研究に資すべき者少からず。其樣式を見るに、多少佛敎藝術の影響を受けたる形迹を有すれども、未だ北魏特有の忍冬文現れず、其蓮花文の如きも亦比較的古調を帶ぶ。其年代を案ずるに、蓋千四百年前を下る者にはあらざるべし。

此塚の名稱に就きては、其前室の東西壁に各方龕を有し、其內に神像の如きものを圖したるを以て、假に龕神塚としたり

七四　星塚（四九九　五〇九）

花上里古墳群中最北にある圓墳なり、高句麗時代に普通なる石槨を有し、內面に漆喰を塗り、其上に繪畫文樣を施せり。玄室の壁の隅には柱及び一種奇異なる斗栱を圖せり、一見我飛鳥時代の雲斗を想起せしむ。玄室の四壁には當初四神圖を寫せしならんも、剝落辨じ難く、唯南壁の朱雀のみ鮮明に遺れり、又別に壁面に、奇古なる蓮花の如きもの、忍冬に類したる文樣を描けり、持送及び天井には簡なる唐草文及び星象を見はせり。よりて假に星塚と命名したり、壁天井の構築粗拙にして、裝飾亦簡疎なれども、奇異なる斗栱と文樣とを有するは注目に價す、恐らくは約千四五百年前の者ならん。

七五　安城洞大塚（五一〇　五二六）

眞池洞驛の西北約十六七町、平安南道龍岡郡池雲面安城洞の丘陵上に在り。（地圖三參照）其規模宏大なるが故に、假に安城洞大塚と命名したり。內部は玄室前室及び羨道より成り、前室と玄室との通路の左右壁には奇異なる壁龕を設く。前室の天井は三區に分ちて構成せられ、壁天井共に漆喰の上に繪畫文様を作りたれども剝落多く、且全體に黝黑色を呈し分明を缺く處多し。唯前室の壁畫に見はれたる建築の細部及び裝飾の文様は尙觀るべく、特に南壁の樓閣の圖は當時の建築の形態を察するに足るべし。

七六 雙楹塚（五二〇・五二七　五八二）

眞池洞驛を西北に距る約十二三町、安城洞大塚の東南約四町、平安南道龍岡郡池雲面安城洞の高地の畑中に在りて、（地圖三參照）外形著しく破毀せられたり。內部は前後兩室より成り、前面に長き羨道を有せり。前後兩室の通路の左右に八角形の柱二支あり、よりて假に雙楹塚と命名せり。此柱

に柱頭及び礎盤を有するは頗奇にして、簡單なる裝飾を施し、柱身には赤色地に黄色の蟠龍を描きたり。羨道の兩側壁には多數の男女の人物及び牛車、馬、騎馬人物等を彩繪し、前室への入口の左右の壁には力士の像を作れり。

前室の四隅には斗栱を圖し、東西壁には蒼龍白虎を畫き、南壁入口の左右には人物の立像を寫し、天井持送には種々の文樣をあらはし中心には蓮花文を描きたり。

玄室の四隅には亦斗栱を畫き、北壁には樓閣中に夫妻の座像あり、蓋墓の主人公なるべし。東壁には九人の立像ありて、內に一人の僧侶を混せり。西壁には天蓋狀の下に何物かを圖せしならんも今は毀損せられたり。天井の裝飾は大要前室に同じく、奇矯なる文樣の裡に日月星辰等の象をあらはせり。

此墳墓は、其石槨の構造の奇なるのみならず、男女の人物車馬等を圖す

る事多く、且頗寫實的なるを以て當時の風俗の一斑を知るに足るべし、其人物の面貌姿勢の優雅なる、牛馬を描くに勁健なる筆を用ひたるが如き、實に六朝時代繪畫の好個資料たるを失はず。之に加ふるに、斗栱の如き、樓閣の如き、各種の文樣の如き、一として當時に於ける藝術の樣式幷に發達の程度をトするに足るものにあらざるはなし。其築造の年代は約千四百年前を下らざるべし。

七七　肝城里蓮花塚（五八二―六〇〇）

平安南道江西の東南々約二里半、普林面肝城里の園山と稱する小丘の頂部南端に在り。（地圖三參照）內部は玄室及び前室より成り、其前に羨道ありて南面せり、前室の東西壁及び北壁左右に小龕あり、內に天蓋樣人物等を寫せり北壁の西方の者稍明かに辨ずべし。天井は三區に別たれ西區に雙楹塚の者と殆同樣なる蓮花文鮮に遺れり。よりて此墳を肝城里蓮華塚

と命名したり。玄室の四隅には二重肘木の斗栱を圖し、天井三角形持送の下面には三足烏、巴文等を寫したれども、他は剝落多く分明ならず。修築の際槨內より二本の鐵釘を發見せり、蓋木棺に用ひしものなるべし。此墳は約千四百年前頃に成りしものならん。

七八 遇賢里三墓（六〇一・六〇二）

平安南道江西邑の西約三十町、平野中に三基の大圓墳鼎立す。是れ所謂江西遇賢里の三墓なり。（地圖三參照）

七九 遇賢里大墓（六〇三・六〇五――六二九）

遇賢里三墓中南方に位する者にして、最大なり。故に假に大墓と稱す。墳徑約百七十尺、高二十九尺、石槨は良質の花崗石の大材を用ひ、構造尤巧にして、手法精美を極む。玄室內には石床二を安んず。蓋木棺の臺石なるべし。

壁天井には花崗石上に直に彩色を以て繪畫文樣を描き、雄麗豐美を極む。即四壁には四神圖を作り、天井持送には或は忍冬文蓮花文、或は麒麟鳳凰を圖し、或は天人、飛雲、神仙、山岳を描き、且天井の中心には雲龍文を見はせり。何れも支那南北朝時代の樣式を發揮し、我飛鳥時代の者と最親密の關係を示せり。其蒼龍の繪は梁の蕭侍中神道碑に陽刻せる者と形式を同じくし、其鳳凰の圖は我法隆寺金堂の天蓋に懸けたる木彫の鳳凰に似、其忍冬文樣は支那南北朝時代及び我飛鳥時代のものと符節を合するが如し。蓋此墓は南北朝末若くは隋初に築造せられしものなるべく、今を距る約千三百五十年前頃の者ならん。

八〇　遇賢里中墓〔六〇四・六三〇——六四五〕

遇賢里三墓中西北方に位するものにして、規模大墓に亞ぐ。故に假に中墓と命名せり。墳徑約百五十尺、高約二十六尺あり。其石槨は大墓の如く堅

緻なる花崗石の大材を用ひ、玄室は四壁皆一石にして、天井は二重の持送の上に大石を覆はれて成れり。四壁に四神圖を描く事大墓に等しく、手法尋洗鍊を加へたるを見る。持送には南北朝式の忍冬文樣をあらはし、天井には中央に蓮花、南北に鳳凰、東西に日月を描けり。床は、三枚の大石を敷きたるのみにて、石床を存せず。當初木棺を置きし者ならんも、今朽敗して其破片は漆の碎片と共に室內に散亂せり。其年代は、恐らくは大墓に次ぎて築造せられし者ならん。

八　遇賢里小墓〔六四六―六四八〕

遇賢里三墓中東北のものにして、最小なる故に假に小墓と命名す。墳徑約百三十五尺、高約二十二尺五寸。石槨の形式は大墓に似て、四壁天井皆良質の花崗石を以て築造せられたれども、壁畫文樣等の裝飾無し。年代は他の二墳と大差無かるべし。

八二　黄山南麓古墳(六四九―六五二)

八三　黄山西南麓古墳(六五三・六五四)

八四　黄山南腹古墳(六五五)

八五　青龍山西南麓古墳(六五六)

平安南道龍岡の邑西二里、黄山と稱する小山の南腹より南麓一帶の地に古墳群あり(地圖三參照)封土頽壞して石槨の露出せる者十の八九なり。是等の石槨には板狀の石材を組合せて四壁となし、一大石を以て其上を覆ひし者即撑石式のもの多きも、之と相隣接して高勾麗の墳墓に通有なる持送天井式の者も少からず、蓋共に高勾麗時代の遺蹟なるべし。

八六　桂明洞古墳(六五七・六五八)

黄山の北約二里、桂明洞民家の西北なる平野中に數基の小古墳あり（地圖三參照）玄室には漆喰を塗り、四隅に柱及び斗栱を赤色を以て描けるのみにて、他に何等の裝飾をも認むる能はず。

八七　龍岡邑附近古墳（六五九）

平安南道龍岡邑、黄龍山下に數基の古墳あり（地圖三參照）亦持送式の天井を有するものなり。

八八　雲化洞露出石槨（六六〇―六六二）

山上に昔時墳墓の封土失はれて石槨の露出せる者にして、此附近に於ける此種撑石式石槨の最偉大なるものなり。全部花崗石より成り、特に天井石は長徑二十八尺餘あり。蓋平安南道龍岡郡黄山南麓なる撑石式のものと同性質のものならん。

八九 新店洞古墳（六六三）

一の封土内に二槨相並んで羨道の入口を現はせるものにして、構造粗なり。高勾麗時代には一の墳墓中に二室或は三室を有し、各室間に通路を設けたる者少からざれども、此は單獨の石槨二處相並びて一封土内に存する者なり。

朝鮮古蹟圖譜解說第二册 終